

問題 一 『感性文化論 ―〈終わり〉と〈はじまり〉の戦後昭和史―』 渡辺裕

問一	ア	脳裏	イ	規則	ウ	提案	エ	策	オ	錯誤
問二	<p>今の一般的な感覚では、国際化とは世界標準化であるが、東京大会では、音楽やオリンピック賛歌、競技の号令、場内アナウンス等、様々な場面で日本語と日本式形態が多用され、戦前文化のような違和感があるということ。</p>									
問三	<p>今のわれわれの感覚だと、「国際化」のためには、ローカルな日本語を捨てて英語を採用する方が自然であるので、英語で行っていた競技の号令をわざわざ邦語化するのは、本質的な認識の差があるとしか考えられないから。</p>									
問四	<p>自国語を基盤にした文化の確立こそが、近代国家のあるべき姿だと考えていたから。</p>									
問五	<p>現在のわれわれは、個々の文化を平準化してグローバル化することを国際化だと考えがちだが、戦後当時の日本人は、日本語を基盤とした文化を確立した上で、それを世界に開示することを「国際化」と考えていたのであり、その視点は、文化の多様性および日本文化についての新しい視界を開くはずだ、ということ。</p>									

(参考文字数)

(101字)

(101字)

(38字)

(143字)

問題 二 「うまねむる」(『土に贖う』所収) 河崎秋子

問一	ア	イ	ウ
	左往		
問二	<p>農具をつけて学校の畑を耕していた馬が、教師の下手な操作のせいで無理に力を入れて前脚を折る大怪我をし、駆け付けた獣医が馬を安楽死させた。</p>		
問三	<p>林先生の馬の扱いが下手で危なっかしく、いつ事故が起きるか心配して見守っている。</p>		
問四	<p>Aでは「雄一は」と限定することで読者の視点を雄一に向けさせ、 Bで「頑として」と付け加えて雄一の心情を明示するとともに、 Aでの「残った」をBでも「居残った」と繰り返し強調している。</p>		
問五	<p>雄一は、自分の納得のために父から馬の怪我の明確な原因を聞いたかったが、 父親は、馬の死を誰かの責任にせず、馬に携わる一員として受け止めており、 その仕事に対する毅然とした態度に圧倒されたから。</p>		

(参考文字数)

(67字)

(39字)

(89字)

(94字)

問題 三 『十六夜日記』 阿仏尼

問一	問二	問三	問四	問五
①	延暦寺	鎌倉に向かう母の旅の仮寝の草を枕にした夜々の不安な気持ちを察すると、都にいる私の袖も涙で濡れることだ。	「ふり」と「鈴」	息子が相の詠んだ五十首の詠草を見て、亡くなった夫・為家の喜ぶ姿に思いを巡らし、夫が為相の成長を頼もしく思う気持ちを推察すると共に、今こうして息子の姿を見られない亡き夫に対する追慕の念からも、声を出して泣かずにはいられないという気持ちを込めている。
②				
③				
不安も一通りでない				
歌も大変大人びてきた				
親心の欲目ででもあろう				

(参考文字数)

(51字)

(120字)

問題 四 『呉船録』 范成大

問一	問二	問三	問四	問五
つねにはあらずして	午	わずかにてんはすうしやくあるのみ	溪谷から雲や霧のかかる十二峰に準ずる珍しい山々の絶景を見ていると心が満たされるなあ。	筆者は、巫山を直に見て、世間に伝えられる巫山の画は皆違っていると思い、お抱えの画家に川の中ほどに船を浮かべ巫山を忠実に写生させて、晴曇を問わず雲が溪谷の美景を彩りながらあちこちにたなびいている巫山の真の絶景を、自分だけが表現できたと考えているから。

(参考文字数)

(42字)

(120字)